

末 黒 野

すぐろの

10月号

(通巻914号)



手縄

森清堯

卯の花やトンネル多き峠道
菓子工房灯る卯の花腐しかな
万緑や天守めきたる岩の峰
溪流の風の蛇行や夏つばめ
奥社径山あぢさゐの思ふまま
渡り廊の軋む一所や五月闇
切岸の鬘を点して野萱草
川の面に揺るる篝火遠河鹿
十本の手縄自在や鵜匠の目
川音も風も馳走や川床料理
本宮へ磴の百段鴨足草
放牧の牛の黄のタグ草いきれ

濃紫陽花

岡野里子

苔青し沓脱石の濡れそぼち
江戸と肥後分かつ八橋花菖蒲
雨よりも日差の重し濃紫陽花
その中の白こそ良けれ七変化
雨来ると思ふや雷の大太鼓
雨脚の大路に弾む半夏かな
池の辺はカメラポジション翡翠飛ぶ
黒南風や白波たてて戻り舟
夕去りの山の日留め合歡の花
夏蝶や激つ流れの丸木橋
木洩れ日や里田へ注ぐ山清水
丘の上の旗流信号風死して

牧の牛

黒滝志麻子

(顧問)

少年の直に吹く笛夏の星
 夕焼に染まりて戻り牧の牛
 青芒すぐに乱るる兆し見え
 炎天や顔の大きな磨崖仏
 風鈴の音を競はせ菓舗古りぬ
 吹き抜くる池塘の風の晩夏かな
 若干の声のほつれか時鳥
 葭切や水郷を行く船頭歌

甲矢集

夕河鹿

森清信子

心地よき川風に乗り夕河鹿
 梅雨寒や湖より重き空の色
 夕照の十葉白を尽くしけり
 蒼空に白雲一朶百日紅
 にここにこと信楽狸炎天下
 郭公や北山杉の覆ふ山
 貴船川風に器に掠気満ち
 焼きたての鮎火の匂ひ藻のほひ
 鶉篝のめらめら空へ闇焦がす
 炎天や弱音を吐かず仰ぐ天

所見良き日

石黒興平

梅雨茸や見れば見るほど訝しき
 網を持つ子らを翻弄黒揚羽
 清流の早瀬にひかり囀鮎
 天然の鮎の色艶手の平に
 梅雨明や鮎寂び初むる鳩の湖
 牧牛の尻の量感夏旺ん
 木道や歩荷の鈴に道ゆづり
 羅や時には意地をはることも
 生き下手の己を隠し葭簾
 担当医の所見良き日の鰻かな

河 骨

菅野日出子

病んで知る人の優しさ薔薇香る
きりもなし隣る寺領の夏落葉
竹林の中の鐘楼藪蚊鳴く
青空を吸ひ込む紅や立葵
糠床の味さだまらず梅雨曇
梅雨晴の雲つき抜けて電波塔
水底をあさる小鷺や梅雨晴間
河骨のひよつと顔出し濁池
高々と凌霄咲かせ老婦人
すてられぬ母の黄楊櫛や土用干



乙 矢 集

配列は音順、月毎の循環



水 中 花

岡 田 史 女

朝顔の苗の伸びゆくあしたかな
蒲の穂や谷戸田の隅に際立ちて
抽んでて谷戸の奥なる蓮の花
古民家の開け放ちたり葭障子
気塞ぎの日々の長くて水中花
白髪の殖ゆるがままや半夏生
不夜城のコンビナートや風涼し

浮いてこい

太 田 良 一

悉 皆 屋

小 田 嶋 野 笛

早起きの鳥の会話や山涼し
浮いてこい禁酒禁煙解禁日
若き日の写真飛び出す曝書かな
黙食と殴り書ある夜店かな
寝付かれぬ旅の枕や遠花火
海の日や絆創膏の接種跡
片空へ雲を畳みて夏終る

焼酎を追加す雨は大粒に
その時の話まざまざ雷火の夜
ほろ酔ひの唄おぼつかな梅雨の月
父の日や父叱られてゐる煙草
半玉のぎくしやくあふぎ京団扇
悉皆屋ならば堀川京鹿子
薄衣や夫無き日日の九年過ぎ

松 蟬 加藤静江

側溝に光るはへどろ夏来る
松蟬や開く庵の明り窓
畦青むかすめて速き鳥の群
騒雨来る昼は無人の駐在所
錆あつき扉にからみ蔦若葉
雲の峰を抜けむと速きタグボート
砂浜の炎昼の脚重さ増す

赤富士 高木邦雄

赤富士の全容映ゆる湖面かな
篁のさやぎ嵯峨野の朝涼し
歪みなき茅の輪潜りて厄祓ふ
磯蟹の走る荒磯忘れ潮
老農の眉を開きぬ喜雨激し
揺るる穂や翔ぶをためらふ天道虫
潮騒の岬の小径夏あざみ

四国周遊 長尾タイ

動く影金刀比羅宮の木下闇
簪やはりまや橋に探す夏
天を突く龍馬の像や雲の峰
灼くる砂桂浜の風ぎ渡り
坊ちやんの絡繰時計夏旺ん
身を反らし鮎の流れへ網を打つ
大歩危の白き急流風涼し

ひまはり 池乗恵美子

目の合うて後ろめたしや墓
ほととぎす日照雨のあとの静けさに
函嶺や一期一会の夏帽子
楽となる遠き波音夏座敷
香水や銀座の風を賑ははせ
ひまはりや彼の地の空も青からん
捨石へ縋る空蟬朝日影

油 照 今村千年

防人の歌碑立つ寺や濃紫陽花
そこだけに日の差してをり日輪草
早苗田の水嵩増しぬ雨な降りそ
蓮の花香りほのかな源氏池
古井戸は生家の名残柚の花
油照露座の大仏身じろがず
夕端居ところを得たる齢かな

心 太 大川暉美

青青と棚田膨らみ梅雨明くる
雨上がり紫紺の艶の初茄子
渡船待つ声の賑やか夏帽子
川筋を灯して群の芹の花
一言を躲す夫なり心太
はひはひの尻追ひかけて天瓜粉
夕風やむづかる稚の仰け反りて



青炎集 森清堯選



横浜 上月智子

つちくれをつつき鳩糸蚯蚓
近寄れば遠退く声や夏蛙
人気無きほまちの小屋や蚊遣香
夏至の夜の篠突く雨や樋溢れ
一列のグランド整備梅雨あがる
紅を差す事の遠退き夏帽子

横浜 六崎正善

万緑やペールのごとき雨の糸
栗の花揺れて野山の風さそひ
闇に浮く夾竹桃の白さかな
炎天の重たき影を背負ひけり
ぱつと出てぱつと消えたる蜥蜴かな
一望の山の端淡く夏の月

横浜 滝口洋子

犬三匹の巨頭の寄りて梅雨夕焼
パソコンに疲るる脳や月涼し
炎昼や信号待ちの長きこと
初めての馬券買ひけり夏の夕
山間の小さき社や大茅の輪
雨足のはげしき音や夏椿

横浜 武田ナナ

採れたての花付胡瓜かじりけり
掘り立ての玉葱ごろんドアの前
夏料理力タカナばかり大皿に
紫陽花や文学館の夕明り
鹿の子餅廻す茶席や京鹿子
手放せぬ文箱の写真風入れて

横浜 宮元陽子

緑さす風の抜け道切通し
畑暮るる空の青さや麦の秋
黒南風や波音高く韻踏まず
荒屋の大なる四葩空の色
明易し睡れぬ刻の慰めに
防災の井の屋根傾ぎ炎天下

横浜 神谷さうび

夫在りし日への案内か道をしへ
斑猫と出会ひてよりの迷路かな
あぢさゐの若紫や雫また
うすうすと引く細波の音涼し
池渡る風に危ふし糸とんぼ
のぼり詰め蔓持て余す凌霄花

川崎 平澤侃

豆蔞くや青鳥除けの凧びらり
難聴の人等長生き夕端居
父の日や同じ病の考五十路
拾ひ物持て交番へ玉の汗
甚平や病みて骨皮筋衛門
人棲めぬ星となるかの猛暑かな

横浜 阿部重夫

青蛙に触れてみむとて子の思案
峰峰に沸き立つ雲や夏の空
翡翠や水面に写るシルエット
入道雲静ひもなく崩れゆく
額咲きて此の名清なる隅田川
文机のガラス文鎮夏書して

横浜 山口郁子

借景の遠富士の暮れ合歓あかり
沙羅の花夕べのうちを散り急ぎ
風鈴や陶と鑄物の二重奏
探しもの見つからぬ日の薄暑かな
八重葎小谷戸の小径ふさぎをり
阿夫利嶺に雲の峰立つ亭午かな

横浜 戸田澄子

初蟬の一声時を惜しみけり
籠るとは学ぶことなり戻り梅雨
戻り梅雨一日詠まねば痴呆めき
海の日の実朝の海賑はひて
夏露の著き山路や芦ノ湖畔
打水や手桶柄杓のなつかしき

耕 土 集 岡野 里子 選



天空の朝風涼し野天風呂

横浜 平田 きみ

芦ノ湖の海賊船や青き嶺

油照り重機の工夫黒光り
手枕の工夫や樹下の三尺寝

横浜 佐藤 勝代

雲の峰ベイブリッチゆゆつ船
肉じやがの香る夜風や夏灯

百合二輪吐息のごとく匂ひけり

初浴衣腰上げをとき髪を結び
夜濯や明日試合のユニホーム
でむしの這ひたる跡や葉の光り

緋のダリア雨つぶはじき艶めきぬ

横浜 近藤 知子

筍流し身体のごこか軋み出し

横浜 三浦千恵子

炎昼のからす黙して息荒し

花合歓の耀ふ中やあそぶ鳥

波ひくや浜のをちこち蟹の穴

夏菊や母の墓前に黄と白を

配管や水漏れありと梅雨に入る
リハビリに同齡者をり梅雨晴間
娘との食事の菜や臯月晴れ
吹き渡る風の強さや山開き

塔頭の朝の光や蓮の花

横浜 鈴木 英雄

毎朝の人と会はずり梅雨曇
梅雨晴や重き鉄扉の競馬場

川崎 木村 純子

炎昼や歩めば凹むアスファルト

路地裏の片蔭を行く片身かな

杭の上の羽を十字の河鵜かな

力尽く蚯蚓はてなを形取り

ユーミンの流るる古書肆大夕立
雨宿りのバックパッカー日焼して

暑き日や水の言葉を並べたて

横浜 大山みさ子

狭き庭日照雨の中を夏蝶来

閃光に耳塞ぎたる白雨かな

夏草や墓碑に絡みて匂ひ立つ

ビール飲む流し掃除の終へし後

時の日や進みぐせある置時計
ひまはりや明るき世をと希ひ

横浜 鈴木千恵子

ちらほらと男の差せる日傘かな

狭山 山中 ミツ

ドライブの季語を尻取る帰省かな

二年ぶりの姉とおしやべり夏の夕

七七日の遺詠を読むや半夏生

住職の日傘差してや鈴の音

嗅覚は未だ健在の茅の輪かな
うめえぞと飲み干す麦茶海人ら

横浜 喜田 君江

客船待つウッドデッキや白日傘

横浜 古宇田伸子

日盛や鳩水浴の甕の水

潮風を連れて茅の輪をくぐりけり

飛びとびの松影求め炎天下

うたた寝の夫のおきぬけところてん

四十度夾竹桃の火花立ち
青みどろ主失せたる鯉の池

横浜 伊藤 鴉

朝焼や二度寝の窓の風の音

横浜 村田 敦子

青梅のうぶ毛光るや水の中

雨やむや大樹の蔭の黒揚羽

野萱草途切れ途切れに野辺の道

太陽光のパネル並ぶや夏野原

水拭ふ手の鼓深し夕涼み
風鈴の隅々抜くる古家かな

横浜 岩崎 藍

夏座敷空腹満たす微炭酸
冷感度百パーセントとふ夏ぶとん

猪口の肝胃の腑に落とす土用入り